

国際シンポジウム

東京農業大学戦略プロジェクト

モンスーンアジアにおけるアグロエコロジカルな『連帯』による新たなフードシステムの構築

日時：2025 年 10 月 28 日（火）9:00 開場 9:15～17:00 どなたでも参加いただけます。

場所：東京農業大学国際センター2階 カンファレンスルーム1・2（対面/Zoom）

報告者： 宮浦 理恵（研究代表者、国際食農科学科）

吉野 馨子・高梨子 文恵・中窪 啓介（食料環境経済学科）、各国招へい者

事前申込制：<https://forms.office.com/r/1B24yufKTa> 【10月23日(木)まで】

懇親会：17:30～ レストランすずしろ 会費制（一般 3000 円、学生 1000 円）

使用言語：英語

後援：国際食料情報学部 国際食農科学科・食料環境経済学科

趣旨

現代の経済と資本の要請に沿って発展してきたフードシステムは、生産者と消費者を分断し、双方に多面的な課題を突きつけている。持続可能なフードシステムへの転換には、生産者—消費者関係の再構築と、市場交換を超える価値を認識する「連帯」の醸成が不可欠である。多様な実践の意義とそれがもたらす変容を的確に捉えるためには、生業の文化的側面を含む地域生態系に目配りするアグロエコロジーの視座が有効である。本研究は、アグロエコロジーの観点から、生産者—消費者の連帯に基盤を置くモンスーンアジアのフードシステムの実現可能性を、大陸部（ベトナム、バングラデシュ）と島嶼部（インドネシア、フィリピン）の文脈に即して検討する。

欧米で発展してきたアグロエコロジーが掲げる生態学的健全性・経済的実行可能性・社会正義を統合する食農モデルを参照しつつ、対象4か国から招へいする9名の実務者、研究者とともに、欧米の枠組みでは捉えきれない「アジア的アグロエコロジー」の輪郭と実装可能な方向性を描く。ここで目指すのは、イノベーションや規模拡大、AI・バイオテクノロジーといった成長ストーリーだけでは掬い取れない、アジアに芽生える持続可能性のロジックを地域の連帯に支えられた具体的実践として抽出することである。

発表概要

バングラデシュ バングラデシュにおける有機農業の課題と可能性

Md. Rashedur Rahman: バングラデシュにおける有機農業の実態と課題について、政策等も含め包括的に紹介する。

Md. Khurshed Alam: バングラデシュにおいては有機農産物の流通に大きな隘路があり、その課題と考えられる方策について報告する。

Md. Abu Bakkar Siddique: マスメディア業界から一転、新規就農。果樹を中心に「自分の家族に安心して食べさせられる」ことを基準に有機・減農薬の農作物を栽培・販売してきた。その経験を踏まえ、バングラデシュにおける有機農業推進普及のために必要なことを提言する。

インドネシア インドネシアにおけるアグロエコロジーへの移行と認証の道筋

急速な経済成長を背景にポストコロナ期にジャワ島・バリ島で進む新たな潮流を紹介する。政府主導の若者起業支援、地方行政による化学肥料から有機肥料への転換支援、「有機村」創等。

Apri Larastio : インドネシアで最も古い有機農場 Agatho Organic Farm の事例報告。生産体制と販売の実態、消費者との連携、直面している課題を具体的に示す。

Ronald Shiddiq Wibowo : インドネシアで認定されている有機認証団体の一つ BioCERT

Indonesia のケースから、国内の有機農産物生産の現状と認証システムの仕組み・運用を解説。

ベトナム ベトナムにおける有機農業：PGS ベトナムの発展動向

Tran Manh Chien 氏 & Dao Van Dai : ベトナム全体の有機農業の動向と、PGS ベトナムによる有機農業の振興、Chien 氏が経営する自然食品店 (Bac Tom) の概要、Chien 氏自身の有機生産者支援、Dai 氏が経営する Hoa Binh 省のエコロジカルファームの紹介等。

フィリピン フィリピンにおけるアグロエコロジー移行への草の根の道筋

Gary Ben S. Villocino : 生物多様性の持続可能な利用と管理を通して、農村コミュニティのエンパワメントに取り組んできた MASIPAG の経験を紹介する。かれらは特に、科学者や地域の NGO、農民組織の協働によって培われた遺伝資源・生物資源、農業生産および関連知識を、農家自身が管理することの重要性を強調している。

Mabi David : 生産者と消費者をつなぐ連帯に基づくモデルとして CSA をローカル化してきた Good Food Community の経験を紹介する。さらに、コロナ禍に伴う食料不安の影響下で、ケソン市の都市貧困層との連携を通して、この活動がどのように発展したかを提示する。さらに、同団体が社会的企業として、フィリピンのアグロエコロジー運動の一翼を担うに至った過程を共有する。